南半球便り（その 102）：千客万来

3 月 16 日

外交は人の営み。国と国との関係も、詰まるところは人と人との関係に帰着します。その意味で、コロナ禍が漸く落ちつき、旅行制限が解除され、日豪間の人的交流が再活性化しつつあることは慶賀の至りです。今回はそのご報告です。

１．政治レベル

昨年 10 月末に岸田文雄総理のパース訪問が実現したことは既にご報告したとおりですが、本年は日米豪印（クアッド）首脳会合を豪州が主催する年。再度、岸田総理が豪州を訪問されます。日豪関係をかつてない高みに押し上げる格好の機会になることでしょう。

日豪首脳会談（2022 年 10 月、写真提供：内閣広報室）

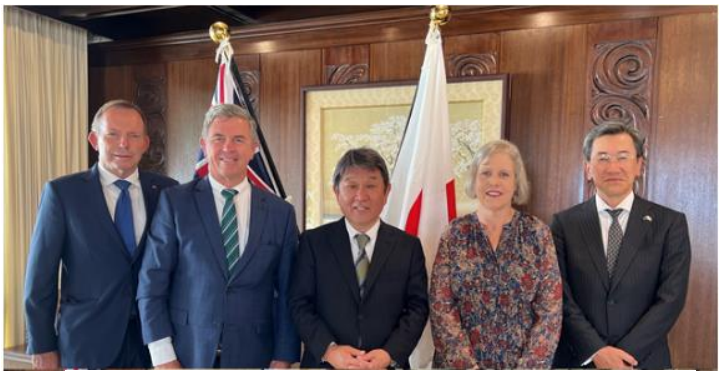
閣僚レベルでは、昨年は金子恭之総務大臣、萩生田光一経産大臣（いずれも当時）が訪豪。今年に入ってからは、茂木敏充自民党幹事長、遠藤利明総務会長に加え、平井卓也衆議院議員（初代デジタル大臣）率いる自民党議員団も来訪。政治レベルの交流活発化を象徴する展開です。

茂木幹事長は、シドニーで、外相時代のカウンターパートだったマリーズ・ペイン上院議員と旧交を温めるだけでなく、アボット元首相、ファレル貿易大臣、豪日議連の新旧会長のビリック上院議員・ギレスピー下院議員とも精力的に会談されました。

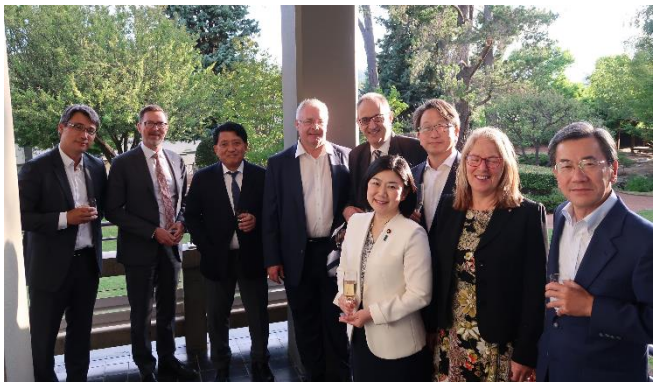
アルバニージー首相は既に二度訪日。安倍元総理の国葬には、現職と元職合わせて４人もの首相経験者が訪日した豪州です。まさに「魚心あれば水心あり」とばかりに双方向の交流が深まることが期待されます。

金子総務大臣は訪豪中にアボット元首相への
叙勲伝達式に出席（2022 年７月）
（左からアボット元首相夫妻、金子総務大臣）

萩生田経産大臣（中央）の訪豪（2022 年７月）



茂木幹事長の訪豪（2023 年１月）
（左からアボット元首相、ギレスピー上院議員、
茂木幹事長、ビリック下院議員）



自民党議員団の訪豪（2023 年１月）
（平井卓也衆議院議員（左から３人目）、平将明衆議院議員（右から３人目）、牧島かれん衆議院議員（右から４人目））

２．経済界

貿易・投資の紐帯が日豪関係の基盤を作ってきたことは、ご案内のとおりです。
そうした繋がりを体現するかの如く、旧知の中村邦晴・住友商事会長、今井誠司・みずほフィナンシャルグループ会長、片野坂真哉・ANA ホールディングス会長らに次々とキャンベラを来訪していただきました。

実は、私が豪州各地で講演をするたびに唱えているのが、764-942 という数字です。私の口座のピンナンバーではありません（笑）。日本が輸入している石炭の 7 割、鉄鉱石の 6 割、ガスの 4 割、砂糖の 9 割、牛肉の 4 割、小麦の 2 割が豪州から来ているという、驚くべき数字です。豪州との補完的な経済関係がここまで発展してきたのは、日本の商社マンの汗と努力の結晶なのです。

豪州における存在感を年々伸長させている点では、メガバンクも負けていません。豪州の地場を占めているのは、いわゆる 4 大銀行。日本の 3 メガは、プロジェクト・ファイナンスを初めとして近年顕著に業績を伸ばしており、豪州でも 4 大銀行に次ぐ存在です。日豪経済関係が貿易から投資に拡がり、今や日本が累積では第二位の直接投資国（2020 年については、一位）になっている実態を裏打ちしているとも言えるでしょう。

こうした経済の人流を支える上で、航空会社の役割は不可欠です。コロナ禍で豪州の航空各社が日本線を運休させる中でも、ひたすらシドニーに飛び続けた ANA。強烈な印象を残しました。３月末からはその羽田・シドニー線は週 14 便まで回復。秋からはパース・成田線も復活。シドニーに加えてメルボルンをカバーしている日本航空と合わせ、何とも心強い存在なのです。

中村住友商事会長（右から 3 人目）の来訪
（2023 年 2 月）

今井みずほフィナンシャルグループ会長（中央）
の来訪（2023 年 2 月）

片野坂 ANA ホールディングス会長
の来訪（右から３人目）
（2023 年 3 月）

３．知的交流

旧知の國分良成・慶應大学名誉教授（前防衛大学校校長）にお越しいただいたのも、嬉しい限りでした。押しも押されもせぬ中国政治研究の泰斗。豪州のインテリジェンス機関を統括する立場にあるアンドリュー・シアラー国家情報庁長官やリック・スミス元豪州駐中国大使など、私が日頃から意見交換を重ねてきた方々と公邸で丁々発止の意見交換を実施。誠に興味深いやりとりとなりました。

國分名誉教授の訪豪（2023 年 3 月）

（左 2 人目からスミス元豪州駐豪大使、リグビーANU 名誉教授、國分名誉教授、シアラー国家情報庁長官、シューブリッジ Strategic Analysis Australia CEO、ヴァン・ハウゼン ANU 国家安全保障カレッジ副所長）

2 年前には、東大の高原明生教授にお越しいただきました。その後、外務省の先輩でもあるキャノングローバル戦略研究所の宮家邦彦・研究主幹、同志社大学の村田晃嗣教授、さらには、白川方明・青山学院大学特別招聘教授（元日銀総裁）、日本経済研究センターの伊集院敦首席研究員らが来訪されました。

価値と戦略的利益を共有する日豪両国が、「特別な戦略的パートナー」として協力関係をさらに深めていく上で、「戦略的認識」の摺り合わせは必須です。そのためには、政府の外交・情報・国防当局者のみならず、こうした学者やシンクタンク関係者による深く突っ込んだ知的交流が死活的に重要なのです。

４．スポーツ交流

水野明人・ミズノ株式会社取締役社長率いる関西経済同友会スポーツ委員会の方々の来訪も、幅と深みを増しつつある日豪の人的交流を象徴するものでした。「スポーツ大国」豪州に学ぶべく来訪された由。2032 年のブリスベン夏季五輪・パラリンピックに向けた日豪の

協力も注目されます。

水野ミズノ社長（2 列目中央）率いる関西経済同友会スポーツ委員会の訪豪（2023 年 2 月）

そのかたわらシドニーまで脚を伸ばしてくれたのが、サッカーの鹿島アントラーズ。同じ茨城県の水戸に二年間暮らしていた私としては、豪州チームとの練習試合に駆けつけて応援したいのは山々でした。残念ながら今回はキャンベラからのモラル・サポートにとどまりました。

鹿島アントラーズユースとウェスターン・シドニー・ワンダラーズ FC ユースの
練習試合の模様（2023 年 3 月）

また、この「南半球便り」でも紹介した野球のチーム・オーストラリアは、WBC 一次ラウンドで韓国を破り、初の準々決勝に進出するまでの活躍を見せています。日豪スポーツ交流が、これまでのラグビーやサッカーなどにとどまらず、更に拡がり深まっていく予兆を示してくれました。

５．「オージー、ウェルカム。」

むろん、キャンベラの日本大使公邸のダイニングルームや庭園は、日本からの来訪者の利用に資するのみならず、まずは、豪州人の客人をもてなすためのものです。前回の便りに記述した、天皇誕生日レセプションのような大型行事の主催が重要であることは言を俟ちません。同時に、小人数での夕食会こそ、打ち解けたやりとりができる好個の機会です。その際、キャンベラ在住者に加えて、豪州国内の遠隔地や日本に住んでいるオージーをキャンベラに迎えて公邸でおもてなしをするのも重要で、やり甲斐に富んでいます。

年明け早々にシドニーから来ていただいたのがマレーバス創業者のロン・マレー夫妻。今やシドニー・キャンベラ間を高速バスでつなぐマレーバスは、豪州の誰もが知る存在です。もともとは、日本からの観光客相手のバスツアーを広く運営していた由。日本の旅行会社、日本人観光客に対する信頼の厚さに強く印象づけられました。

続いて、豪州に一時帰国していた日本在住のメラニー・ブロック女史と、彼女の知人達との会合も大変盛り上がりました。コラムニストとして日本事情を豪州に伝えつつ、三菱地所の社外取締役に豪州人として初めて就任したメラニー。彼女のオープンで包容力ある性格と日豪関係に対する熱意のため、話題が尽きることはありませんでした。

マレー・マレーバス創業者夫妻
（右から 2 及び 3 人目）の来訪（2023 年 1 月）

ブロック女史（左から 6 人目）の来訪
（2023 年 2 月）

さらには、豪州長者番付第一位の座を長年独占してきた大富豪ジーナ・ラインハートが、パースからプライベート・ジェットで飛来。多忙を極める「鉄鉱石女王」ジーナのキャンベラ滞在時間は、日曜夜の僅か 2 時間半。タイトなスケジュールを縫って、公邸のカウンター「リトル・トーキョウ」で寿司と天ぷら、そしてダイニングルームで神戸牛を堪能して貰い、じっくりと語り合いました。西豪州マーガレット・リバー産のとっておきのワインに相好を崩してくれました。何よりも、丸紅や国際協力銀行（JBIC）とのビジネスを通じて培われた日本に対する気持ちの温かさに打たれました。

「鉄鉱石女王」ジーナの来訪
（2023 年 3 月）

６．草の根の交流

このような VIP や要路の方々との交流を通じて日本の立場や政策への理解と支持を増やしていくことの重要性は、いくら強調しても強調しきれません。

一方、日豪関係の基盤を支えてくれているのが草の根の交流であることは、まごうことなき実態です。その観点で言えば、シドニー日本クラブの方々が創立 40 周年を記念して、はるばるキャンベラまでバスを借り切って来訪されたことに、ひときわ感激しました。

活力みなぎるコステロ久恵会長を始め、豪州へ永住されている方々約 25 名。天高く爽やかに晴れ渡った南半球の秋の週末、公邸の回遊式日本庭園でのガーデンパーティーを楽しんでいただきました。

シドニー日本クラブの来訪（2023 年 3 月）
（コステロ久恵会長（前列中央））

「海外で暮らすということは、日本を常に、しかも過剰に意識すること。」とは、藤原正彦さんの名言です。日本クラブの方々はまさに日本とオーストラリアとの接点と言うべき世界に身を置いて挑戦と苦労を重ねてきておられる同胞。率直で臨場感溢れるお話をうかがうにつれ、明日からの仕事に立ち向かっていく意欲と活力をふんだんにいただきました。

こういう場面に接するたびに、今や「かつてなく良好」と評されている日豪関係が更に進展していくポテンシャルに溢れていることを痛感するのです。

山上信吾